

『テレビ創業期の人たちの証言集1～7』(1978年)

メディア研究部(メディア史) 米倉 律

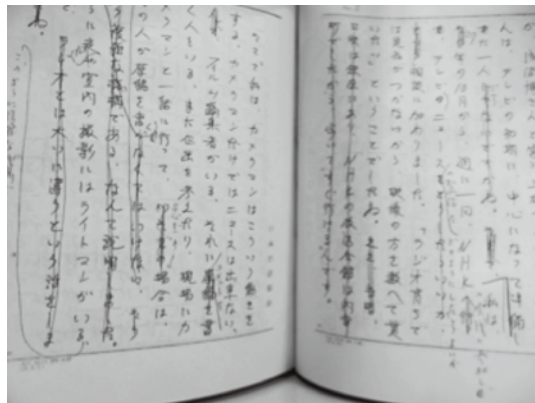
はじめに

今回紹介する『テレビ創業期の人たちの証言集1～7』(1978年作成、放送文化研究所資料室収蔵)は、1953年にテレビ放送がスタートした当時を知る人々(NHKおよび外部の関係者)の証言を集めて7巻にまとめた未公刊史料である。収められた証言は、テレビ放送開始当初の現場の雰囲気、テレビ放送にかける当事者達の熱い思いをよく伝えており、あと2年で“還暦(=60周年)”を迎えようとしているテレビの歴史を振り返るうえでも貴重な記録である。

本冊子の特徴 ～ 多様な分野からの証言

聞き取りが行われたのは今から35年ほど前(1976～77年)である。テレビ史研究のための基礎資料として作成されたこの冊子(写真参照)は、400字詰めの手書き原稿用紙を簡易印刷にかけて製本したものである。すでに一部の文字は色が薄くなって判読が難しくなりつつあり、何らかの方法で修復・保存する必要がある。

収録された証言者は27人で、インタビューはNHK放送文化研究所の番組研究部(当時)の職員によって行われている。本史料の最大の特徴は、戦前におけるテレビ研究・実験の時代から1957年までの期間を対象に、この期間に活躍した放送、技術、管理などさまざまな分野にわたる関係者・当事者の証言を収録している点



である。放送史をめぐる証言には、番組制作者やアナウンサーなど、いわば放送の「表舞台」で活躍した人達のものが多いが、ここに収められた多様な証言は、既存の資料・書籍などでは明らかにされていない事実を含め、草創期のテレビ放送の実相をより立体的に浮かび上がらせるものである。

その全貌をここで紹介することはできないので、以下では、経営・管理系、技術系の職場で活躍していた人達の証言(1～2巻)のいくつかに注目してみたい。

「寝ても覚めてもテレビジョン」

日本のテレビ本放送は1953年2月1日にスタートした。ドイツが1935年に世界初の定時放送を始めてから、第二次大戦を挟んで18年

表 本冊子に収められた証言者

①政策決定者	春日由三	元専務理事。テレビ放送開始の前年、編成局長としてアメリカのテレビ界の事情視察
	溝上銈	元副会長。技術者として黎明期からテレビ研究に一貫して参画
	宮城島勝也	テレビ放送開始当初、制作技術担当。創業期の技術革新に貢献
②実験関係者	宮川三雄	昭和7年にアナウンサーとして入局後、編成、企画を経て技研テレビ実験班の責任者へ
	大峯昇	元報道局長。日映制作本部長から昭和28年にNHK入局
③カメラ・フィルム関係者	田畑雅	戦前はニュース映画カメラマン。創業期にNHKのカメラマン養成指導に当たる
	大石吾一	本放送の初期、フィルム現像に従事
	宮寺啓之	テレビ放送開始当時、横浜シネマ現像所で設備建設や現像処理方式の開発に従事
	矢作保次	テレビ放送開始当時、横浜シネマ現像所で設備建設や現像処理方式の開発に従事
	広田祐一	元富士フィルム勤務。テレビ用フィルムの開発、国産化に努める
	佐々木収造	テレビ創業期に日映からNHKへ移籍。テレビ用フィルム編集技術の発展に寄与
	志村源二	昭和28年、カメラマンとしてNHK入局。初期のニュースや社会番組制作に従事
	毛塚欽三	昭和28年末にマキノ映画からNHKへ移籍。35ミリから16ミリへの転換を推進
④ディレクター（ニュース関係）	奥村公示	カメラ商としてテレビカメラを中心とする機器の納入に尽力
	胡桃沢友男	昭和22年入局、ローカル局でラジオ番組制作後、28年からテレビニュース制作に従事
	原敬之助	元テレビニュース部長。朝日映画、新理研映画を経て昭和28年NHKへ
⑤ディレクター（社会番組関係）	渡辺躋	昭和20年10月復員後、ラジオの社会番組担当。テレビ開局後は中継の分野で活躍
	小田俊策	昭和15年入局、28年にテレビ報道班に移り、初期のドキュメンタリーを制作
⑥その他の部内関係者	白石克己	昭和26年入局、テレビ番組研究班などで実験番組を担当
	大田善一郎	昭和24年入局、記者から映画部へ、ニュース担当のかたわらドキュメンタリー制作にも従事
	古田正信	昭和14年、アナウンサーとして入局。フィルム調達やニュース制作などに従事
	吉田信	昭和21年入局、テレビ創業期にはテレビ班の経理を担当
	青木一雄	昭和14年、アナウンサーとして入局。ラジオアナウンサーからテレビアナウンサーへ転換
⑦部外関係者	芳賀三千生	昭和29年、日映からNHKへ入局。テレビのBGM、効果音の専門家として活躍
	加太こうじ	評論家。紙芝居の体験をもとに紙芝居とテレビを対比しながら独自の映像論を展開
	桑野茂	日映出身の記録映画作家。『ドキュメンタリーの世界』の著者
	村山英治	短編映画会社社長。映画からテレビへの手法継承に注目しながら映像論を展開

遅れてのスタートだった。しかし、本放送以前の研究段階や実験放送の時期を含めると、日本のテレビ放送にも短くない前史が存在する。NHKが放送技術研究所を開設したのは1930年で、その時点ですでにテレビ研究がテーマとして設定され、1940年のオリンピックが東京で開催されることが決まると（後に開催中止）、研究体制は拡充され、実験も本格化していった。

当時の技術者で、戦後は放送技術研究所長やNHK副会長などを歴任した溝上銈氏は、「戦争がなければ、明らかにオリンピックで何らかの形で（テレビ放送を）やったに違いない」と証言する。彼らは戦前、すでに送信設備や中継車、そして受信機もすべて国産で製作することに成功していたのである。同氏によれば、こうした基礎研究の蓄積こそが、戦後のテレビ本放送スタートやその後の急速な技術革新のベースになったものだという。

こうした前史を経てテレビ本放送は開始されたわけであるが、開始当初の時期についても、証言では、予備免許の取得競争で日本テレビに先を越されたNHKの当時の職員らは「悲憤慷慨で、みんな涙をポロポロこぼして残念があった」といったエピソードや、テレビ受信料額決定の経緯、テレビ放送に向けた組織改編の詳細などが語られている。この時期にNHKの編成局長を務めた春日由三氏は、テレビ放送開始当時の雰囲気をごう述懐している。

「…あの時の火のついた感じというのは、今じゃ分からないですよ。おそらく古垣会長以下、心労なんてもんじゃなくて、寝ても覚めてもテレビジョンを始めることばかりだった毎日です。」
「あの時はNHKの連中で満身にテレビジョンを見た者はいないんじゃないですか。（初めて放送が出たときには）みんな涙が出て、あんな感激というのはちょっと類がないでしょうね。」

人気のなかった「テレビジョン局」

こうして鳴り物入りで始まったテレビ放送ではあったが、意外にも、テレビを担当する部局である「テレビジョン局」は、職員のあいだではあまり人気がなかったという。

テレビは、ラジオと比べると制作体制も設備も大がかりだったので、「とにかくテレビは道楽息子で、金ばかり食ってしょうがない」(宮川三雄氏)という受け止め方が支配的で、「大部分の職員が当時はテレビジョンに行くのをいやがっていました。それが実情でした。～(中略)～将来テレビがラジオに取って代わるといけど、その将来とはいつのことか…」(春日由三氏)と、テレビの普及には多くが懐疑的だったのである。

その最大の理由としては、当時のテレビ受像機が極めて高価な「ぜいたく品」だったことが挙げられる。当時の受像機は大半が輸入品で、14インチで17～8万円、17インチで24～5万円ほどであり、平均的なサラリーマンの収入が月額1万5～6千円、東京・大阪間の国鉄運賃が3等で680円のこの時代には、テレビを持つことはほとんど「夢物語」であった(NHK編『20世紀放送史(上)』NHK出版、2001参照)。

実際、テレビ受信契約数は、テレビ放送開始から1年経った1954年4月時点でも全国で1万6,779件にすぎず、テレビ局職員でもテレビを持っている人はほとんどいなかったという。

「私が当時、テレビで文化映画についての座談会の司会をやったんですよ。2時間の番組でした。うちの女房に「俺、テレビに出るよ」といったら、見ようというので方々の駅に行っただけで、テレビがないわけです。そうこうしているうちに、放送が終わりちかくなって、やっとテレビをつけているラジオ屋を見つけたら、

それから5分位で終わってしまったそうです。そういう時代ですよ。」(大峯昇氏)

テレビニュース事始め

フィルムが高価で設備も十分でなく、パターンや静止画が多用されて「電子紙芝居」と揶揄されることの多かったテレビニュースをめぐっても興味深いエピソードに事欠かない。

当初、撮影したフィルムを現像する自前の設備を持たなかったNHKでは、フィルムを横浜の業者「横浜シネマ商会」で現像したうえで、千代田区内幸町の放送会館まで車で搬送していた。「(昼のニュースに間に合わせるため)運転手の志村さんが21分30秒の記録を出したとか、今のラッシュ状態ではとても考えられないスピードで突っ走り、横浜の警察からにらまれて、年中酒を届けたり、NHKの催し物の切符を届けたりしていた時代」(大峯昇氏)であった。

それでも放送に間に合わない、というときにはヘリコプターが使われることもしばしばあったという。戦前からニュース映画のカメラ

マンとして活躍し、戦後NHKに入ると、テレビ草創期には取材カメラマンの育成指導にあたった田畑雅氏は次のように回想する。

「取材で使うヘリコで撮影ずみフィルムを持っていっ

当時のNHK放送会館
(千代田区内幸町)



て、横シネの庭に落とすわけですよ。そしてヘリコは近所の学校に不時着と称して降りて、現像が上がるまで待っている。そして現像が済むと、日比谷まで飛んでくるんですが、急ぐときにはヘリコの上で編集しながら来たこともありました。～(中略)～日比谷まで来てはまだ編集すべきフィルムが残っていると、NHKの上空を旋回して、その間に最後までつないで、落下傘をつけて日比谷公園に落としました。それを待ち構えていた人が受け取って、駆け足で放送会館まで持って行って放送したことが再々ありました。』

同時代(1970年代)の変化に対して…

インタビューが行われたのは今から35年近く前であるが、今読み返すと、同時代(1970年代半ば)に起きている様々な変化に対する彼らの見方も時代を反映していて興味深い。

例えば、テレビ草創期から制作技術を担当していた宮城島勝也氏は、ニュース取材におけるフィルムカメラからビデオカメラ(ENG)への転換について、「こういうことができて面白いから使おうという、テレビ業者仲間の感じにあまり惑わされないような、もっと本当に何をみんなに見ていただくべきかという観点」が必要だと警鐘を鳴らし、取材における機動力の向上が、掘り下げの浅い表面的な報道に終始することに帰結しないようにすべきだと指摘している。

また、春日由三氏も、この時期に発売が始まった家庭用ビデオデッキについて、「電波の同時性」という放送のメディア特性が無意味化される可能性に早くも注意を喚起している。そしてビデオデッキが普及する時代には、「同時性」を売り物とするニュースを中心とした番組と、ワイドショーのような「生活の伴奏みたいな放送」

などの「メリハリ」をつける編成が重要となるだろうという注目すべき予言もしている。

証言のデジタルアーカイブ化へ

以上、『テレビ創業期の人たちの証言集』の特徴や内容の一端を見てきたが、最後に、こうした貴重な証言を、今後どのように受け継ぎつつ、研究等に活用していくべきかという問題に触れておきたい。

当研究所には本史料以外にも、さまざまな証言が収集・保管されている。本誌で定期的に掲載している「放送史への証言」はそのひとつであるし、テレビ40周年、50周年といった各タイミングにおいて、また『20世紀放送史』(2001年刊)を編纂するプロセス等において、多くの証言が収集されてきた。さらには、放送業界のOBらが組織する「放送人の会」が独自にヒアリングを続けている「放送人の証言」などもある。

これらの証言集は今後、デジタル化・アーカイブ化されることによって、放送史、テレビ史を体系的に理解していくうえで極めて有益な史料群となる可能性を持っている。そこでは各証言は、それぞれ独立したものではなく、相互に時間軸や意味内容(番組やキーワード)等に沿って有機的に関連づけられるものになる。また、他の映像、文書史料とも関連づけられることで、放送史、テレビ史は、性格の異なる多様な資料群(映像、文書、証言)によって複合的かつ立体的な形で再構成されることになる。

そうしたデジタルアーカイブが作られれば、今回紹介した先人達の証言もまた、新たな意味や意義を付与され、これまでとは異なる光彩を放ち始めるだろう。

(よねくらりつ)